

■今月の特選句



犬掻きの鼻先に来る夏の波

田中やすあき

犬かきで沖に向かって泳ぐのは大変だね。なかなか進まない。泳いでいるのは作者で人間なのだが、まるで自分が犬になったような感覚になる。



わらつちやうくらい金持ち黄金虫

谷本 宴

もしも黄金虫が純金でできていたら…。確かに笑いが止まらないね。もしも、太刀魚がプラチナでできていたら…。哀しいニュースより楽しい空想を。



私からこぼれたやうに花柘榴

山本 賜

筒状の肉厚の萼に包まれて、八重の花をつける。観賞用で実はつけない。紅い花の少ない時季にひとときわ目をひく。こぼれたのは情念か慈愛か。

■今月の特選句



水割に夏の音させショットバー

吉川正紀子

いきつけのバーに行く。顔なじみの常連に会釈をしてカウンターに座る。「いつもの」と言えば、バーテンダーが好みの味をマドラーでひと混ぜ。



天守閣でんぐり返し夏燕

西野周次

天守閣の側で燕がぐるりと宙返りするように飛んだ。その瞬間、作者は燕と一体になり燕の視点になったのである。天守閣はぐるりと一回転。



無尽蔵の滝浴び心無一物

柳 紅生

瀧水を浴びる時、それほど信心の心はなくとも敬虔な気持ちになるものである。尽きることのない水を一身に受けていると、心が洗われ空っぽに。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

| | |
|--|-------|
| いい人で終はるいい人心太 ・・・強い個性も手ごたへもなし | 長井多可志 |
| 白百合のあち向きなれどよくにほふ ・・・背面からも美は醸さるる | 相原共良 |
| 子どもみな退屈してる鵜飼船 ・・・魚屋さんで買えばいいじゃん | 遠藤真太郎 |
| どの色も味はおんなじかき氷 ・・・ぜえんぶ食べてやつと気がつく | 石塚柚彩 |
| 男料理はどれもごつくり夏大根 ・・・男料理を褒めて手を抜く | 稲葉純子 |
| 恋の行方知るや木蔭の赤電話 ・・・恥ずかしくつて未だ赤面 | 花岡直樹 |
| 指揮はかのベートーヴェンや大夕立 ・・・びしょ濡れとなる運命ジャジャン | 上山美穂 |
| 炎天や五七五が字足らずに ・・・極寒なれば字余りとなり | 岡田廣江 |
| 父撃たる母の狙ひし水鉄砲 ・・・スナイパーの過去隠しきれずに | 白井道義 |
| 全身浴させて紫陽花生き返る ・・・その技の可否水掛論に | 和田のり子 |
| 魂の抜ける瞬間かき氷 ・・・アイスクリーム頭痛で目覚め | 月城花風 |
| 冷蔵庫の中は空っぽ八月尽 ・・・白もの家電の買ひ替へ時か | 桑田愛子 |
| 夏期賞与入るその日が返済日 ・・・拝むことなく賞与は失せて | 高田敏男 |

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

| | |
|-----------------------|--------|
| 玄関に差されし手紙も梅雨じめり | 相原共良 |
| 賑やかに巢立をならふ燕の子 | 相原共良 |
| シャンソンは庶民の嘆きパリー祭 | 青木輝子 |
| 時の日や老いの光陰烏兔忽忽(うとそうそう) | 青木輝子 |
| 老いという未知なる世界日日花 | 青木輝子 |
| 父の日の愛の御守りぼけ封じ | 赤瀬川至安 |
| 酒星やなんでんかんでん値上げをる | 赤瀬川至安 |
| 尺蠖の愛は曲げるが勝ちらしい | 赤瀬川至安 |
| 三島由紀夫の『青の時代』や七変化 | 荒井 類 |
| 筍に旬あり竹の下に座す | 荒井 類 |
| 寺山と津島の「しゅうじ」夏に死す | 荒井 類 |
| 歯を削る音を消せぬか暴れ梅雨 | 井口夏子 |
| ため息のほろり溢れて海月かな | 井口夏子 |
| 簾越しスッポンポンのザンブラコ | 井口夏子 |
| 父の日やごぼうび恐縮カンビール | 池田亮二 |
| AIは玩具か神か夢占い | 池田亮二 |
| 父の日や届く焼酎酒ワイン | 石塚柚彩 |
| 今時の梅雨は激しきゲリラ雨 | 石塚柚彩 |
| 地震の揺れか自身の揺れか炎天下 | 伊藤浩睦 |
| 人動き闇に紛れて毒流し | 伊藤浩睦 |
| 滝の上に揚水ポンプあると聞く | 伊藤浩睦 |
| 冷麦を食べてもふたり熱い仲 | 稲葉純子 |
| 昼寝の子夢の中でも昼寝かな | 稲葉純子 |
| 特大の紫陽花の毬何グラム? | 井野ひろみ |
| 出る足のまだ活かされず蝌蚪泳ぐ | 井野ひろみ |
| サングラスかけてお目目に昼寝させ | 上山美穂 |
| 梅雨晴間涙の神様のおやつ時間 | 上山美穂 |
| タロットカードの香水つよき占い師 | 遠藤真太郎 |
| 腕時計はずし異国へ夏の旅 | 遠藤真太郎 |
| 変はらないことに胸張り冷奴 | 大林和代 |
| 一基増ゆ女神輿のメゾプラノ | 大林和代 |
| シワシワとシワシワ笑ふ涼しさよ | 大林和代 |
| 深呼吸万緑の天仰ぐとき | 小笠原満喜恵 |
| 子つばめの巢立は近し羽づくろひ | 小笠原満喜恵 |
| 解禁の鮎初物として齧り | 小笠原満喜恵 |
| こだわりの青梅みつけ三軒目 | 岡田廣江 |
| 野茨のごきげんななめかひつかき傷 | 岡田廣江 |
| 扇風機足でこつそり向きを変へ | 加藤潤子 |
| 痒いのよ虫に愛されたくないわ | 加藤潤子 |
| 水不足トマトはすねて実をつけず | 加藤潤子 |

杏子熟れ甘く見えても酸っぱーい
 百合の香や六地蔵も振り向かす
 皐月咲く中山競馬は皐月賞
 全身が色見本なり鴛鴦(おしどり)は
 清張に『黒文字の花』ありさうな
 香しき花粉をはなち夫婦杉
 世話人のすくなくなりし夏祭
 再開も祭はきつし四年振り
 サングラス「赤いグラス」のアイ・ジョージ
 朝顔や夕べに枯れる生を生き
 白楽天の舞い降りさうな秋の空
 黒揚羽乗っても乗っても伊予鉄道
 サンドルを並べて売ればアフリカ人
 六月の頭痛腰痛天気病
 十の字にサイコロに切り冷奴
 花石榴落ちて不発の手榴弾
 宅配の飛脚炎暑の旧街道
 老鶯長鳴く雨や紫君子蘭
 カンナであつたか咲いて御幸寺の雨の山
 いつの間の畿望の月や半夏生
 青嵐郊外電車連れて行く
 人を乗す遊具に人のをらず夏
 彫刻の裸婦に群がる遠足子
 百雷の雲湧きあがる赤城山
 大尽の話を囲む木下闇
 父の日の父を上座に祭り上ぐ
 床屋とは理髪店なりつばめの子
 部屋干しの幾日つづく長梅雨の
 天の川薄絹まとふ八ヶ岳
 はたた神道案内は遠回り
 スマホの中曾孫のおしゃべりカタコトの
 大きめよなんでもない日のおはぎ
 笑顔のサミット人間臭さを隠してる
 汗だくの風呂上がりかなバスタオル
 とろ〜りと甘く仕上がる南高梅
 ほつぺたのおつこちさうな桃に会ふ
 盆路やこの世のわが家は仮の宿
 夕焼や鳥は帰り人は屋台へ

門屋 定
 門屋 定
 門屋 定
 北熊紀生
 北熊紀生
 北熊紀生
 木村 浩
 木村 浩
 金城正則
 金城正則
 金城正則
 久我正明
 久我正明
 久我正明
 工藤泰子
 工藤泰子
 工藤泰子
 くるまや松五郎
 くるまや松五郎
 くるまや松五郎
 桑田愛子
 桑田愛子
 壽命秀次
 壽命秀次
 壽命秀次
 白井道義
 白井道義
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 高須賀溪山
 高須賀溪山
 高須賀溪山
 高田敏男
 高田敏男

| | |
|---------------------|--------|
| なめくじに持ち家勧めむかたつむり | 竹下和宏 |
| AIはもうええわいと冷奴 | 竹下和宏 |
| 限界の隠し技なり水着の娘 | 竹下和宏 |
| 十薬の白も匂ひもいとほしき | 田中 勇 |
| 占ひに未来を計り時計の日 | 田中 勇 |
| 間はぬのに告げられて知る今日は夏至 | 田中 勇 |
| 短夜に薄目開きて夢見けり | 田中やすあき |
| 夏瘦と縁なき妻のフライパン | 田中やすあき |
| 夏の旅会計係は消去法 | 谷本 宴 |
| かき氷好きな人みな善き人よ | 谷本 宴 |
| おつまみは薬味多めの冷奴 | 千守英徳 |
| 夕焼にピンクの雲と黒い島 | 千守英徳 |
| 鈴虫の声を頼りに網を振る | 千守英徳 |
| ビー玉の邪魔するラムネ一気飲み | 月城花風 |
| いつの間に増へ体重も夏草も | 月城花風 |
| 怨憎会苦ならば扇子で顔隠し | 土屋泰山 |
| 文庫本に喝入れられる昼寝覚 | 土屋泰山 |
| 五月雨をあつめてごぼぼマンホール | 土屋泰山 |
| 蟻の道その先頭に行くモーゼ | 長井多可志 |
| 髪洗ひ無職無臭の夫でゐる | 長井多可志 |
| 噴水を浴ぶ子らの声跳ねてをり | 長井知則 |
| 円虹の帽子被りてデートかな | 長井知則 |
| 男手が触れても優し含羞草(おじきそう) | 長井知則 |
| 彦星は輝く白髪 of 混じれども | 永易しのぶ |
| 女人らは心で登る山開 | 永易しのぶ |
| 幼子の肌を追ひかけ日傘かな | 永易しのぶ |
| 離脱せし手足幾千阿波をどり | 西野周次 |
| 梅雨出水自暴自棄の体にかな | 西野周次 |
| 梅雨明と聞いたとたん にバテてくる | 花岡直樹 |
| 夏バテの特効薬はビアぞなもし | 花岡直樹 |
| ぼうふらのやうな動きやはたきかけ | 浜田イツミ |
| ほれぼれとする瘦身や羽抜鶏 | 浜田イツミ |
| 炎天の採石場やジョンウエイ | 浜田イツミ |
| 目薬に開く泰山木の花 | 久松久子 |
| タクト今フォルテシモに蟬時雨 | 久松久子 |
| 青鷺の何でも知つてゐる貌つき | 久松久子 |
| 涙などちつぽけなもの夏怒涛 | 日根野聖子 |
| 一人来て闇の一部となる夜釣 | 日根野聖子 |
| アリナミンのんで残業八月尽 | 日根野聖子 |

ネクタイの柄になつてる毛虫かな

割箸を再利用する毛虫とり

県道を歩む毛虫の大冒険

遠雷や行くぞ行くぞと気を急かせ

道灼けて喘ぎ喘ぎの老い五体

熱帯夜羊の数や増え続け

芍薬や女の時代まだ遙か

サルビアの朱ほど人を憎みたい

梅雨晴や切手不足の文戻る

返却無用夫を預ける南風の門

預かり不能夫返される南風の門

眩しさを食ひし大樹の涼しさよ

足元に句材探せば虹の立つ

玉手箱開けし悔恨土用波

貧乏性三日で倦みし夏季休暇

土砂降りを三段跳びの小学生

引越しや蠅虎(はえとりぐも)も連れて行く

蒼鷺に飲み込まれゆく鼠の尾

考へるかたち即ちごきかぶり

モンタージュ写真と勝負サングラス

脚立に跨つて虫干の気分

千日手二局続けて梅雨に入る

風薫る野良着姿のゼレンスキー

墓碑銘にツルカメ多し沖縄忌

ねじり花もういいかいともういいよ

風の手が盛り上げていく入道雲

大花火果てて星くず残さるる

天道虫逃げるときには転倒虫

地下道に片蔭あろうはずがない

肌脱や頼まれごとを断れず

弱虫はどこにもいない子蠅螂

我が庭の猫の額に金魚草

虎造と武春のをり蚊の唸り

紙風船打って昭和の音鳴らし

鮎釣の亭主を裁く山の神

根の意地に感じ入りつつ草むしり

噴水に未練預けて離れけり

なめくじり手許不如意の悩みなし

藤森荘吉

藤森荘吉

藤森荘吉

細川岩男

細川岩男

細川岩男

ほりもとちか

ほりもとちか

ほりもとちか

南とんぼ

南とんぼ

南とんぼ

峰崎成規

峰崎成規

峰崎成規

明神正道

明神正道

明神正道

椋本望生

椋本望生

椋本望生

村松道夫

村松道夫

村松道夫

森岡香代子

森岡香代子

森岡香代子

八木 健

八木 健

八木 健

八塚一青

八塚一青

八塚一青

柳 紅生

柳 紅生

柳村光寛

柳村光寛

柳村光寛

毎朝の開花報告古代蓮

特別よピンク色した冷麦は

ドーナツの穴から覗く夏の空

早朝の遠雷昨日の残響か

心地よき枕を探す夏の夜

短夜やスマホの詠みし俳句読む

風鈴や我にもありし幼き日

石積みのダム決壊す川遊び

紫陽花のブーケ花びら群舞して

奥さんの後ろ姿の夏帽子

常連の揚羽コメダの窓ガラスに

本箱もすつかりからつぼ梅雨明ける

ゲリラ雨空蝉葉裏にいつまでも

四年ぶり打ち解けあひし盆踊

いつせいに打楽器鳴らす田の蛙

エステしませんか肌荒れの夏大根

古簾下宿つて何と子に聞かれ

上官の妻テキパキと時計草

寂しいと鳴けずに唸り牛蛙

大皿に盛られし李(すもも)コロコロ

枇杷の実を一途に狙ふ竿の先

山内 更

山内 更

山内 更

山岡純子

山岡純子

山岡純子

山下正純

山下正純

山下正純

山本 賜

山本 賜

横山洋子

横山洋子

横山洋子

吉川正紀子

吉川正紀子

渡部美香

渡部美香

渡部美香

和田のり子

和田のり子